念仏の功徳

念仏三昧の境界

土屋正道

阿弥陀仏と　申すばかりを
つとめにて　浄土の荘厳
見るぞうれしき

法然上人のお歌が残っています。毎日お念仏を六万編七万編とひたすら励んでいますと、おのずから心が静かになり、目のあたりに阿弥陀さまやお浄土のありさまをおがむことができます。身も心も喜びにひたる事ができますのは、本当にありがたいことです。と、法然上人が念仏の一行でお悟りの境地に入られたことを伝えています。

念仏を一心に専ら称えるうちに心が統一され、仏様のお力によって守られることを実感し、感覚・感情・知性・意志が浄化された境地を**念仏三昧**といいます。三昧とはサマーディー（心が統一された状態）の音写です。

念仏の行、水月を感じて昇降を得たり　『選択本願念仏集』

法然上人は、念仏を申す行によって、月影を映す水面が、月に向かって上昇するわけではなく、月が水面に下降するわけでもないが、お互いが同じ境地に至る（感応道交）ように阿弥陀仏と念仏者が一体となる念仏三昧の境地をお示しくださっています。

月影の　いたらぬ里は
なけれども　ながむる人の
心にぞすむ

お月様の光が届かない里が無いように、仏様の光明が照らさない衆生はおりません。本願を仰ぎ、念仏をお称えする人の心に、仏様は必ずお宿りになり心は澄んでまいります。というお歌も念仏により人格の完成、三昧の境地にいたることができることをお示しくださっています。

弥陀身心遍法界

阿弥陀仏の身心は大宇宙に満ち満ちている

衆生念仏仏還念

衆生が仏を念ずれば仏もまた念じ還してくださる

一心専念能所亡

一心にもっぱら念仏申せば申す主体と申す対象（主客）の区別がなくなり

果満覚王独了了

終には阿弥陀如来が独り現前していることが明瞭に実感される

山崎弁栄上人（1859～1920）がお悟りの境地得た（三昧発得）筑波山でのお歌です。法然浄土教の近代的再興と宗派仏教から釈尊仏教への回帰、更には世界宗教に通ずる光明主義は、土屋観道上人の真生主義、中野善英上人の一味哲学へと引き継がれてきました。

従来の死後極楽に迎え取られることのみを「往生」とする傾向を改め、法然上人の念仏観に立って、現世と来世を通じて、如來の光明に生き活かされる私達は、如来の光栄（みさかえ）をこの世界に現す使命があると信じて如来中心の真生運動を続けています。

眞生同盟の信条の綱領第一条には、

私達は「永遠の生命、無限の向上」を求めます。この要求に応ずるものが宗教であります。永遠の生命とは不滅の自覚です。無限の向上とは人格の完成、価値の生活です。

と書かれています。選択本願念仏＝阿弥陀仏が私のために選び取ってくださった本願（仏のすべての衆生を救うという願い）がこもった念仏の行、により必ず如来中心の生活＝眞生が実現されると信じて念仏を称えましょう。

善英上人の眞生一味大念仏は、弁栄上人の三昧発得の歌を安心（安置心＝心の置所）とし、禅と静坐を座相の基礎とし、呼吸と脈拍とを元とした発声法によって、全身が一体となり、天地の大生命活動と貫通する、身心の大調和をきたす口称念仏法であり「申す念

仏」への大革命として、宗教界への一大示唆たらしめん、とされました。

私の恩師の一人、滋賀県長浜の関谷喜與嗣上人に、生前、念仏会の指導をお願いしていました。東京・観智院の御本尊を恭しく拝まれるお姿が今も思い出されます。上人は大きな声で聴衆に向かっておっしゃいました。

「みなさん、この真正面の御本尊様のなんと素晴らしいお姿であることか！いいですか！この木像の仏様が、そのまま、本物の阿弥陀様と拝めなければいけませんよ！！」

「このとおり、このとおりの、真正面に現にいらっしゃる仏様とおがめなければ、浄土教はわかりません！」関谷上人は布教伝道の傍ら農業を営んでいらっしゃいましたが、

「私は大地に膝まづき礼拝し、トラクターに乗り、畑を耕す。私にはトラクターの輝きが、仏様と拝め、エンジンの音が“ナムアミダブ、ナムアミダブ”と聞こえるのです。」と、晩年おっしゃっていらっしゃいました。

また私の念仏の師匠、蘇我尾道英さんは、次のように心境を語ってくださいました。1999年6月19日ことです。念仏ネットワーク眞生会の90歳のお祝い、卒寿祝賀会が観智院前のホテルで開かれました。終了後、蘇我尾道英さんをお宅まで車でお送りしました。運転席の隣に座られた蘇我尾さんが独り言のように言われました。

「不思議ですねえ。私のように中途半端で何もできないものが、どういうわけか和裁の素晴らしい技術を身につけてしまったんです。どうしてできたのか未だによくわかりません」

蘇我尾さんは三越デパート本店で、特注の高級呉服を仕立てる和裁のお仕事を長年務められた方です。

謙遜なさっていらっしゃるのだな。と思って聞いていましたら、次のようにおっしゃいました。

「何十年も続けてきました和裁の仕事をある日を契機にスパッとやめてしまったでしょう？

その後は和裁は一切しませんでした。今そのことを考えると大したものだと思うんです。自分はいい加減なオヤジだと思っているんですが、なぜ、さっと止められたのか？不思議ですねえ」

ご自分のことを話していらっしゃりながら、偉大な方のことを話していらっしゃるような奇妙な印象を受けました。さらに言葉を続けられて、

「自分がした和裁の仕事を見て、なんとすばらしい技術なんだろう。どうしてこんなことができたのか、よくわからないことがありました。私にこんなことができるはずはないのに、本当に不思議ですねえ」

よく神懸かりなどと言いますが、自分のしたことが信じられない。しかもその行為が尊敬できる、大いなる喜びとして感得されている。本当にうらやましいご心境を聞かせていただきました。

私は南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えながら運転をしておりましたが、二人きりで念仏の先達と一緒の車中にいる喜びを感じておりました。

「曽我尾さん、願いを持ち、念仏を申しているうちに如来様が自然とさせてくださるんでしょうね」

尊敬と親しみを込めて私は申しました。

「そう。それしかないんですよ」

九十のご老人は、間髪を入れずに若々しい声で答えられました。

念仏は一念で救われると信じて、息が止まるまで無間に称える。御光により臨終まで守られ育てられると信じて参りましょう。